

昭和三年（一九二八）貞香会は第五周年を迎えた。何か記念の行事を考えたあげく、中国唐の詩人賈島の「祭詩」の改事に倣って、「祭墨会」という祭事を創始することにし、毎年一月十日前後を卜して浦和にある延喜式内の調神社の社務所において祭墨式を午前中に、書初式を午後、午のお赤飯をはさんで行うことになり、漢詩の巨匠国府犀東先生にお願いして祭墨の詩を作っていたが、これを武田霞洞先生に懇請して条幅に書いていただいで式場の神座に掲げることにした。

霞洞先生は、この「祭墨」の二字を大変おもしろいと喜ばれ行事の次第も詳しく聴かれ、第一回の時には青山からわざわざご参会下さった。祭墨詩の作者犀東先生もご出席下さって毎年何かご講演を下された。友人先輩では鳥海鶴洞、関野香雲、新聞静軒各先生、または俳人の川村黄雨翁などもご来臨、それぞれ席上揮毫などして下さった。会の前途を祝福して下さるお言語に、私はじめ若い会員ばかりの貞香会員はみなこの清々しい神事を喜び、抽籤による作品その他を受けたり、記念品「祭墨筆」をもらって、一日の清興とともにまた一年の研鑽を誓って神前に玉串を捧げていた。

この第五周年の第一回祭墨会から偶数月の第四日曜を研究とすることになり、書論、書道史、臨書、課題作をやることになり、書作はすべて必ず抽籤交換して批評もやるので、作品作りの腕を磨くことになった。この研究会は百六十何回かの記録を作り、大東亜戦争による集会禁止まで続き、戦後も復活していた。

春になると、野外研究学をやり寿司・団子など持って桜草見物などをしたことも、懐かしい思い出である。この時の課題研究のために買い蒐めた書論の本、中国日本の原拓類などがみな現存し、後年、大正大学、武蔵大学、淑徳高校などで講義をするのにどのくらい役に立ったか判らない。この研究会がなかったら——と考えると、機会さえあれば人間勉強はやるものだとしみじみ思うことが多い。

年月はみるみる過ぎて、書道会は十余年を経過し、祭墨会が第七

回を迎えるころには、浦和市の調神社々務所では狭くて式事がやりにくいなどの理由（実際には六、七百年の老木に囲まれた社務所の暗い日本間の寒中は、小さな瀬戸ものの火鉢の炭火では防ぎ切れないのと、諸先生はみなご老齢であられるのに恐縮して）で、東京丸の内蚕糸会館という十階建ての近代ビルを借りて行うようになり、東京進出だなどといって大いに喜んでいたが、貞香会日華支部の幹事をして熱心に努めてくれた常泉素紅君が、神田駅前横断歩道で市電に衝突して急逝するようになつて、東京進出はちよつとたじろがされた形だつたが、再び東京以外の地で行われることはなく、神事の神官も県社調宮の宮司さんから東京都赤坂の官弊大社日枝神社の宮司によつて行われるようになり、祭器の美しさにも眼をみはるものがあつた。

これらのことは書道会関係のニュースは大体一応の報道をしてくれたが朝日新聞記者は非常に珍しい催しだとして「日本にひとつしかない墨の祭典」だとしてよく報道してくれた。

時は移り人は変わつて恩師をはじめこの会の発展に資助された老先生方は、次々とお姿を見られなくなり、時代は大東亜戦争前の事変に向かつて疾走するようになり、厳しい緊張の時代を迎えんとしていた。（つづく）

「筆間雜記」中村素堂隨筆集（昭和六十三年刊より転載）

樵唱隔溪山欲暝松
 一路撲衣紵帶將泉
 落度々會巖唯育
 瀑聲搖暮雪

「貞香山房詩鈔」昭和三十六年